

い き め こ ふん ぐん
生 目 古 墳 群 III

— 生目16・17・18・19号墳発掘調査報告書 —



2013

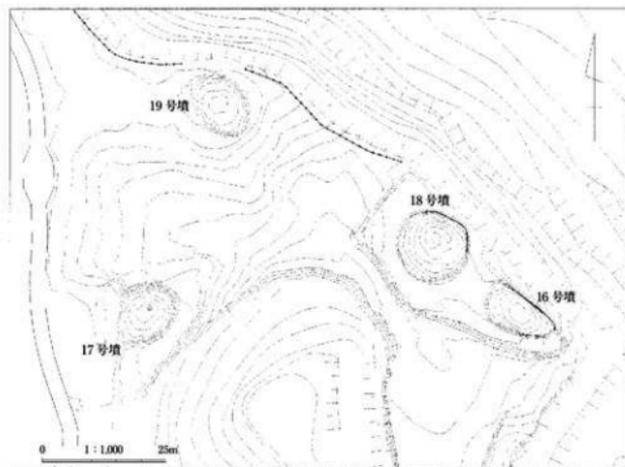
宮崎市教育委員会

表紙写真：生目16号墳墳頂部須惠器出土状況

宮崎市文化財調査報告書 第96集

いき め こ ふん ぐん
生 目 古 墳 群 III

- 生目16・17・18・19号墳発掘調査報告書 -



2013

宮崎市教育委員会

序

平成10年度に開始した国指定史跡生目古墳群の史跡整備事業も、今年で早や15年目となりました。

総数51基の古墳からなる生目古墳群は、3基の100m級大型前方後円墳を中心とする大古墳群です。本書に報告する16・17・18・19号墳は、いずれも大きさ10mほどの小さな円墳であり、他の古墳とは離れて、まるで独立しているかのような特異なエリアを形成しております。今回の調査によって、これらの小さな円墳群は、生目古墳群で前方後円墳がつくられなくなった後のものであることが明らかとなりました。

これら円墳群につきましても、今後、発掘調査の成果をもとに十分な検討を行い、生目古墳群史跡公園の中でも、他の古墳に劣らない特色あるエリアとして整備を進めて参りたいと思います。

最後に、発掘調査、整備工事の実施にあたりご協力いただきました関係諸機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、そして発掘調査、整理事業に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成25年3月

宮崎市教育委員会

教育長 二見俊一

例 言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成24年度に実施した生目16号墳周辺（16・17・18・19号墳）の発掘調査報告書である。

2. 現地調査は平成24年8月6日～25年2月28日、整理作業は平成25年1月28日～2月22日の期間実施した。

3. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会

委員長	西谷 正（九州歴史資料館館長）
委員	石野博信（香芝市二上山博物館館長）
	北川義男（元南九州大学教授）
	白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）
	高瀬要一（元独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長）
	北郷泰道（宮崎県埋蔵文化財センター長）
	柳沢一男（元宮崎大学教授）

整備指導	文化庁記念物課
	宮崎県教育庁文化財課

4. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会
調査総括	文化財課長 田村泰彦
	埋蔵文化財係長 島田正浩
調査事務	主任主事 岩切ひとみ
調査担当	主任技師 竹中克繁
	嘱託 瀧内美智子（現地調査）
	〃 前田美恵子（整理作業）

5. 掲載した図面の実測、製図および写真の撮影は、竹中、瀧内、前田、岸田優子（宮崎市教育委員会文化財課）が分担して行った。

6. 本書の執筆は第Ⅱ章第2節を瀧内が行い、他は竹中が行った。また編集は竹中が行った。

7. 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会が保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	
第1節 地理的環境と歴史的環境	1
第2節 生目古墳群と宮崎平野南部の古墳	1
第3節 生目古墳群史跡公園整備事業の概要	5
第Ⅱ章 生目16・17・18・19号墳の発掘調査成果	
第1節 概要	
(1) 位置と過去の調査	6
(2) 基本層序	6
第2節 詳述	
(1) 16号墳	8
(2) 17号墳	11
(3) 18号墳	16
(4) 19号墳	21
第Ⅲ章 総括	
第1節 出土遺物の性格と時間的位置付けについて	24
第2節 被葬者像について	24

挿図目次

第1図 宮崎平野南部の主要古墳・古墳群分布図	2
第2図 生目古墳群主要古墳分布図	3
第3図 平成7年度調査区配置図	6
第4図 平成24年度生目16・17・18・19号墳確認調査調査区配置図	7
第5図 16号墳調査区平面図	8
第6図 16号墳土層断面図	9
第7図 16号墳墳頂部遺物出土状況	10
第8図 16号墳出土遺物	11
第9図 17号墳調査区平面図	12
第10図 17号墳土層断面図	13
第11図 17号墳周溝外側立ち上がり部(17C)遺構検出および遺物出土状況	14
第12図 17号墳出土遺物	15

第13図	18号墳調査区平面図	17
第14図	18号墳土層断面図	18
第15図	19号墳調査区平面図	19
第16図	19号墳土層断面図	20
第17図	49号地下式横穴墓平面および土層断面図	21
第18図	19号墳出土遺物	22
第19図	生目古墳群における主要古墳の時間的位置付け	25

表 目 次

表 1	生目古墳群一覧	4
表 2	出土遺物観察表	23

写 真 図 版 目 次

図版 1	16号墳調査状況①	27
図版 2	16号墳調査状況②	28
図版 3	17号墳調査状況①	29
図版 4	17号墳調査状況②	30
図版 5	18号墳調査状況①	31
図版 6	18号墳調査状況②	32
図版 7	19号墳調査状況①	33
図版 8	19号墳調査状況②	34
図版 9	16号墳出土遺物	35
図版10	17・19号墳出土遺物	36

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境と歴史的環境

生目古墳群は太平洋に面した宮崎平野のほぼ中央を東流する大淀川下流右岸の、東西1.3km、南北約1.2km、標高20m強の跡江丘陵上およびその周辺に所在する。跡江丘陵は、150～700万年前に形成された宮崎層群を基盤とし、その上に、砂岩円礫層を1mほど挟んで、25,000年前に始良カルデラより噴出した始良入戸火砕流（シラス）が5m以上堆積して形成されている。丘陵上は平坦な台地状の地形であり、古墳に限らず、多岐にわたる時代の遺構、遺物が確認されている。

丘陵上南端には、縄文時代早期の跡江貝塚や弥生時代中期の環濠集落である石ノ迫第2遺跡、中世の山城である跡江城などが存在している。古墳の調査時にも、石器や縄文土器、弥生土器、古代土器など、古墳に属さない遺物の出土することも多い。

跡江丘陵周辺では、大淀川の対岸に位置する北方の丘陵上およびその周辺に、旧石器時代後期を中心とした金剛寺原第1・2遺跡や、垂水第1・2遺跡、縄文時代早期の土器を出土した伊屋ヶ谷遺跡や跡江貝塚と同時期に比定される柏田貝塚などが所在する。弥生時代においては大淀川を挟んで東に位置する下北方丘陵上に、石ノ迫第2遺跡と同じく環濠集落である下北方下郷遺跡があり、多数の絵画土器等が出土している。生目古墳群と同じく古墳時代では、古墳群に近接した平地に中期～後期の堅穴住居30軒以上が検出された間越遺跡や、中期の堅穴住居が確認された大屋敷遺跡などの集落遺跡や、横穴墓を主とする生目村古墳などがある。古墳時代以降においてはやや希薄ではあるが、古代の掘立柱建物や井戸などが確認された深田遺跡や古代～中世の水田址が検出された沖ノ田遺跡、雀田遺跡、中世の山城である高峯城などがある。

一帯は宮崎市の中でも遺跡の集中する地域の一つであり、大淀川に近接した台地状の丘陵とその周辺において、連続とした人間活動が続けられていたことがうかがわれる。

第 2 節 生目古墳群と宮崎平野南部の古墳

生目古墳群は前方後円墳8基、円墳43基からなる。墳長137mの3号墳をはじめ100m級の大型前方後円墳が前期において累加的に築造された九州最大の前期首長墓系譜である。

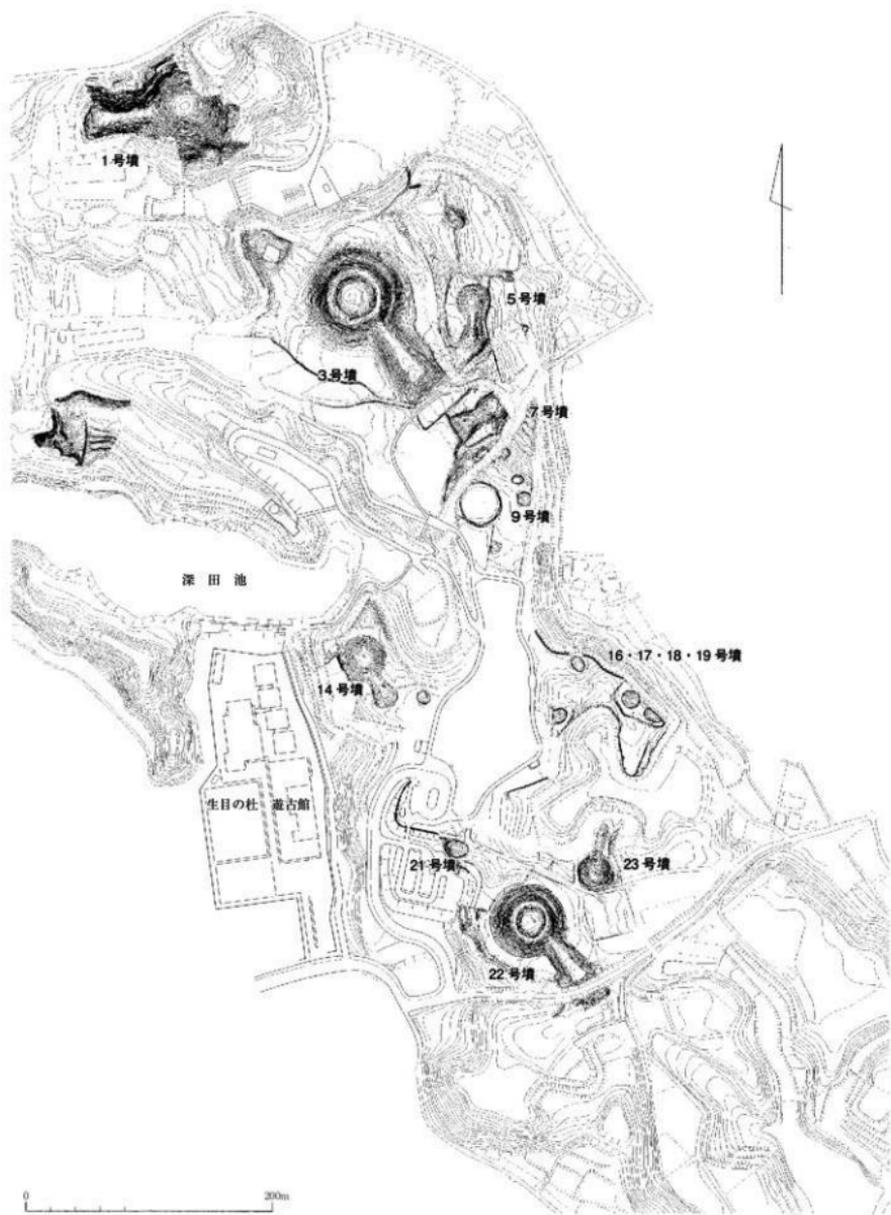
墳長136mの1号墳は、生目古墳群で最初に築造された古墳であると同時に、宮崎平野南部において確認される最初の首長墓でもある。1号墳以降、生目古墳群では3号墳、22号墳と100m級前方後円墳の築造が続くが、宮崎平野南部においては、砂丘突端につくられ、全国的にも数少ない木柵を主体部とする椋1号墳をのぞき、生目古墳群以外の前期首長墓の存在は顕著ではない。1号墳、3号墳は、それぞれの段階における九州最大の前方後円墳であり、生目古墳群は南九州の盟主的な位置にあったと思われる。墳長100m前後の22号墳の段階では、盟主権は一つ瀬川流域の持田古墳群や川南古墳群に移ったと考えられ、生目古墳群の最盛期は終わりを迎える。

前期末から中期初めにかけて、生目古墳群では14号墳、5号墳の2基の前方後円墳が築造されるが、ともに墳長は50m前後であり、直前の22号墳の段階から、急激に規模を縮小させている。この時期、南九州には女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳という畿内地域の直接的な影響のもとに築造されたと思しき大型古墳が登場しており、生目古墳群における首長墓系譜の低調化は、これに対応したものである。これに呼応して、生目古墳群とは大淀川を挟んで直線距離で2kmの対岸に位置する下北方丘陵上では、下北方古墳群の築造が開始される。その後、生目古墳群と下北方古墳群では、互いの空白期を補い合うよう

な形で前方後円墳の築造が行われており、小地域内における首長墓系譜の変動が如実に表れている。中期の段階では、生目古墳群より直線距離で3kmの地点において、壺形埴輪を有する大淀古墳群が存在し、さらに大淀川下流の地域では内行花文鏡を出土したと伝わる広島古墳群なども形成されているようである。



第1図 宮崎平野南部の主要古墳・古墳群分布図 (Scale : 1/120,000)



第2図 生目古墳群主要古墳分布図 (Scale : 1/4,000)

表1 生目古墳群一覧

観No	旧No	墳形	規模 (m) 長×円径×高	規格	基石	出土遺物	備考
1	6	前円	136×86×17		有		
2	5	円	27				
3	17	前円	137×77×11	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世?の薬研堀りが巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×28×4.5	後円部前方部2段	有	円筒埴輪?、壺形土器、高坏	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、 造出し有	有	土師器(甕、壺、碗、高坏)、須恵器 (坏、高坏、ハソウ、把手付鉢、大 甕、脚台付壺、筒形器台)石製垂 玉、石製小玉、石製紡錘車	後円部中心に向かって、18号地下式 横穴墓を構築、その他周溝内から8基、 周溝外から4基の地下式横穴墓を確認。
8	22	円		無段築	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25		34				
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×38×4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より20号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16		無	須恵器	※本書報告
17	32	円	14		無	土師器(壺、高坏)	※本書報告
18	29	円	17		無		※本書報告
19	28	円	15		無		※本書報告
21	35	前円	33	後円部2段	無	壺形埴輪	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段 か?	有	壺形埴輪、土師器(甕、高坏、壺)	周溝内より、張り出し部、23号地下式 横穴墓を確認
23		前円	57×30×4.9		有		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認 (5号墳と7号墳の間)
32	未G	円			無		平成16年度確認 (7号墳南側)
33	41				無		平成14年度確認 (9号墳・新30号墳 間)・概報VIで旧5号墳と誤認・誤表記
34	42	円					
35	36	円					
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12・13号地下式を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

る。生目古墳群では中期初めの5号墳以降、しばらく前方後円墳の空白期をはさみ、中期後半に7号墳が築造される。7号墳は墳長46mの前方後円墳で、後円部墳丘内に大型地下式横穴墓を持つ特異な古墳である。同時期に下北方古墳群では小円墳でありながら甲冑などの武器・武具、金銅製品や鏡等、首長墓級の豊富な副葬品を有した大型地下式横穴墓を主体部とする9号墳が築造されている。生目古墳群では7号墳を最後に前方後円墳の築造が終了し、首長墓系譜は消滅したかのように見える。

中期末から後期前半にかけて、宮崎平野南部では中小規模古墳の築造が多数行われる。砂丘上およびその周辺では村角古墳群や山崎古墳群が営まれ、清武川右岸地域では円筒埴輪を持った前方後円墳を含む木花古墳群が形成される。先述の下北方古墳群では大型墳による首長墓が継続しており、狭小な丘陵上に墳長100m弱の13号墳が築造され、宮崎平野南部地域を代表する首長墓系譜となっている。13号墳のち、首長墓の築造は丘陵下の平野部に降り、盾形周溝を持つ船塚古墳が営まれる。後期後半には前方後円墳は築造されなくなり、大淀川右岸に築造された径40mの大型円墳である福長院塚古墳が最後の地域首長墓と目されている。

生目古墳群では後期後半の7号墳以降、墳丘周辺に多数構築された南九州特有の墓制である地下式横穴墓は顕著であるものの、墳丘を持った古墳では該当するものがなく、高塚墳の築造は完全に終了したものと考えられていた。

第3節 生目古墳群史跡公園整備事業の概要

生目古墳群は昭和18年9月8日に前方後円墳8基、円墳43基の51基が国指定史跡となった。「生目古墳群」の名称は指定当時、一帯が生目村であったことによるもので、現在の所在は宮崎市大字跡江である。史跡指定後、一帯で土地改良事業が行われ、これに伴って複数の古墳が棄損、消滅している。昭和51年、保存管理計画策定書の作成を行ったが、この時には整備事業を開始するまでには至らなかった。平成5年、宮崎市制70周年記念事業として生目古墳群の史跡公園整備事業が取り上げられ、市教育委員会では同年から平成7年まで、丘陵上全体を対象とし、古墳周辺部の未指定地帯におけるトレンチ調査を主とした範囲確認のための調査を行った。また平成8年には宮崎大学考古学研究室による主要古墳の測量調査が行われ、詳細な墳丘測量図が作成されるとともに、それまで漠然と古墳時代中期を中心とした古墳群とされていた生目古墳群が前期を中心とした大型首長墓系譜である可能性が示された。平成10年に整備基本構想・基本計画報告書を作成し、史跡公園整備事業を開始した。同年より今日に至るまで、順次各古墳の確認調査を実施している(表1)。平成16年度には整備実施計画報告書を作成し、平成18年2月6日には、それまで墳丘単位であった史跡指定地を、周辺も含めて追加指定を行い、指定地面積は総計142,982.10㎡となった。平成20年4月、整備事業の当初より調査を行ってきた前方後円墳5号墳の全面復元と、園路、サイン整備等、公園施設の完成をもって国指定生目古墳群史跡公園として開園した。翌21年4月には、隣接して古墳群のガイダンス機能を持った埋蔵文化財センター生目の杜遊古館が開館した。

整備事業は今日も継続中であるが、生目古墳群では古墳個々の調査結果や遺存状態等に応じ、全面復元を行うもの、墳丘上および周辺の樹木伐採、周回園路の敷設、解説板の設置等、簡易な整備に留めるもの、現状保存とするものという大きく3つのタイプに分けて整備を進めている。今日の段階で、全面復元対象として先述の5号墳(前方後円墳・長57m、墳丘棄損部分の復元・葺石復元・従属する地下式横穴墓のレプリカ展示・周回園路敷設・解説板設置)、簡易整備対象として3号墳(前方後円墳・長137m、周回園路敷設・解説板設置)、9号墳周辺(小円墳11・12号墳、樹木整理・外周園路敷設・解説板設置)の整備が終了しており、同じく簡易整備対象として14号墳(前方後円墳・63m、樹木整理・周回園路敷設・解説板設置)を3ヶ年度の計画で工事中である。

第 Ⅱ 章 生目16・17・18・19号墳の発掘調査成果

第1節 概要

(1) 位置と過去の調査

生目古墳群の載る跡江丘陵は、南北に長い長靴状の形状を成すが、数箇所で追が入り、舌状に飛び出す派生部分がある。16・17・18・19号墳は、主となる丘陵部分から東に小さく舌状に飛び出した箇所に築造されており、周辺の古墳からやや独立して存在する観をなす。舌状地形の先端に16号墳、西に隣接して18号墳があり、この2基から30mほどの空白地を挟んで北に19号墳、南に17号墳が位置し、いずれも地形の縁辺に占地している。4基とも現況径10m前後の円墳で、墳丘周縁は垂直に近く切り立った状態のものが多く、大きく棄損していることが予想された。

平成7年度に、史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査として墳丘周辺部のトレンチ調査を実施している。19号墳西側に隣接した19-2トレンチでは周溝状の遺構を検出し、また19号墳からやや離れた西側のE-1、E-2トレンチでは二段掘土坑墓と円形周溝墓、および周溝墓の一部を切る形で横口式土坑墓が報告されている。また17号墳北側のE-5トレンチでは深3.4m以上の谷状の落ち込みが確認されている。全体的に周辺は削平が大きく、遺構の遺存状態は良好ではない。

(2) 基本層序

跡江丘陵では以下が基本的な層序となり、今回の調査箇所においても同様である。

I層 表土

II層 黒褐色土 (0～50cm) 桜島第3テフラ (文明ボラ 1471年)、新燃享保軽石 (1717年)

III層 黒ボク土 (0～30cm) Th-S (霧島高原スコリア 11～13世紀)

IV層 黒ボク土 (0～30cm) 自然堆積層 V層と基本的には同様 古墳築造後の堆積

V層 黒ボク土 (0～50cm) 自然堆積層 IV層と基本的には同様 古墳築造前の堆積

VI層 アカホヤ土 (0～30cm) テフラ層 (K-Ah 6500年前)

VII層 暗褐色土 (80cm前後) ローム層 下位で霧島小林軽石 (14,000～16,000年前) が認められる

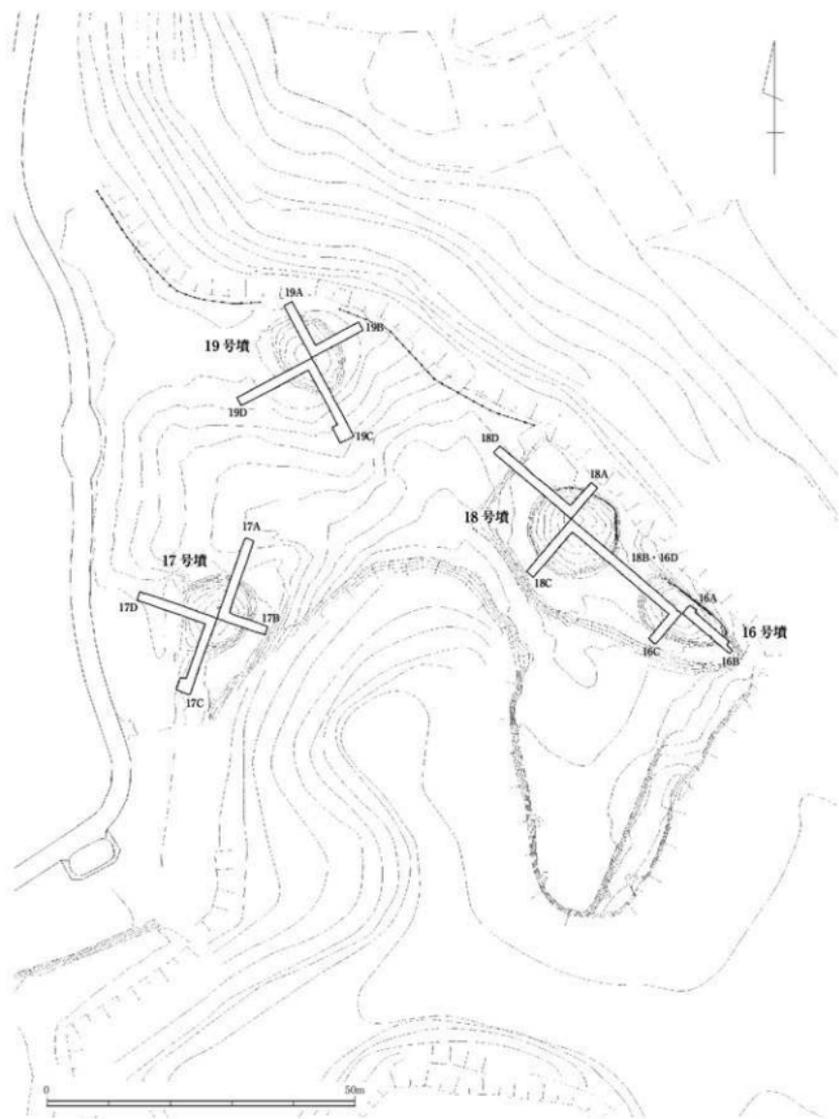
VIII層 シラス (500cm以上) テフラ層 (25,000年前)

V層以下が地山であり、人為的な盛土部分以下では主にVI・VII層の地山削り出しによる墳丘の成形が確認される。またV層以上は、墳丘部分、周溝部分以外の古墳周辺部では、削平により確認することができず、VI層も部分的にしか残っていない。



第3図 平成7年度調査区配置図

※宮崎県文化財調査報告書第28集「史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書」1996.29転載



第4図 平成24年度生目16・17・18・19号墳確認調査調査区配置図 (Scale : 1 / 800)

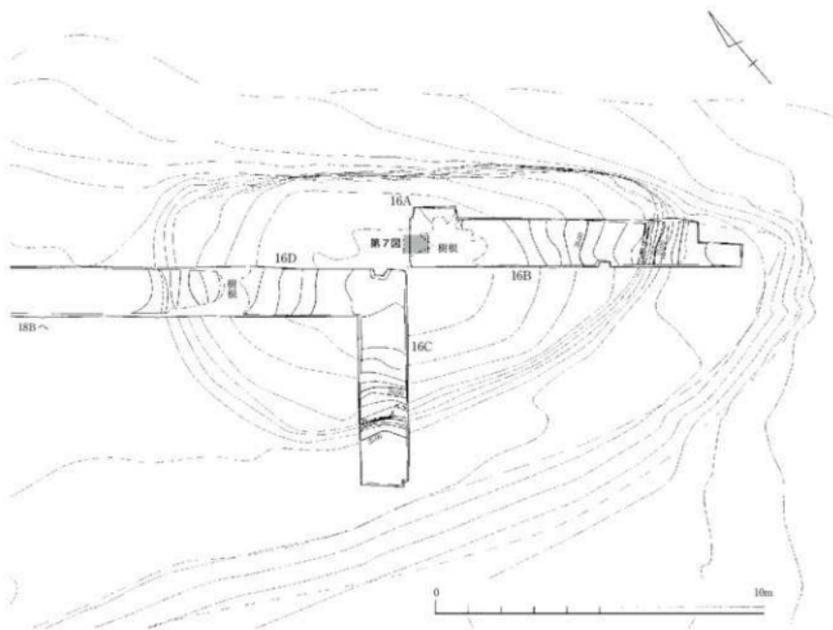
第2節 評述

(1) 16号墳

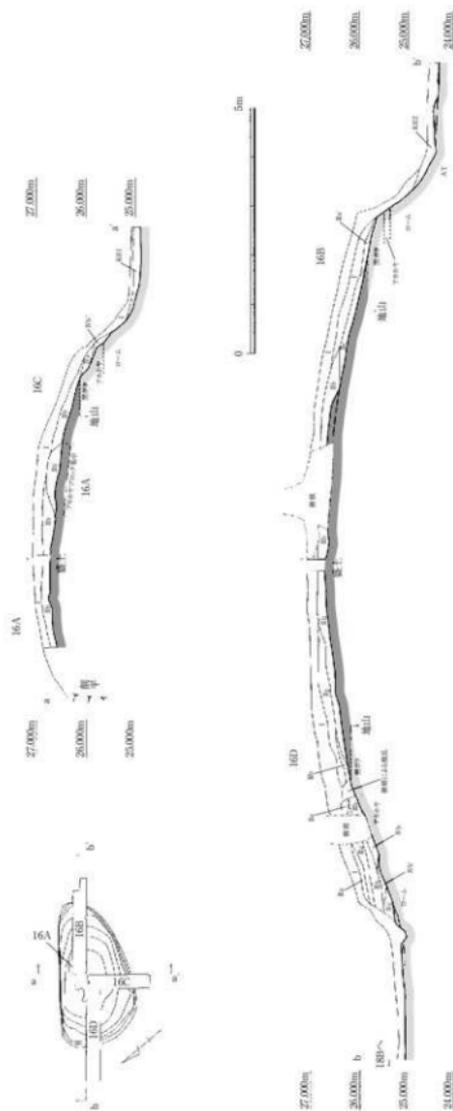
16号墳は現況で、最大径16m、高さ2.2mの円墳である。台地の縁辺に位置しており、18号墳と同様に周辺よりも一段高いところに古墳が立地する。古墳北側はすぐ崖になっており、崖側の墳丘斜面は後世の造作で大きく削平され、墳丘断面が露出し風化によって抉れた状態である。

調査の結果、表土から30～55cm下で墳丘面を確認した。墳丘盛土は黒色土あるいは茶褐色土を主体とし、地山土のブロックを含有する。盛土に含有する地山土はアカホヤが主体となっており、古墳築造の際に周囲を削り出した土を利用しているものと考えられる。墳頂部に設定したトレンチでは樹木の根による攪乱や樹根そのもので土が観察できなかったため、埋葬施設の痕跡を確認することができなかったが、原位置と思しき須恵器を検出した。

16A 台地縁辺の崖に面しており、後世の造作によって墳丘が垂直に近く削平され、断面が露出している。墳丘断面は風化によって内側に抉れていることから、墳丘土崩落の危険があったためトレンチ設定範囲は墳頂部にとどめている。墳丘面のほぼ直上において、須恵器を検出した(第7図)。配置状況が確認できる坏は、蓋の上に身が載った状態であり、古墳主体部にとまぬ須恵器の可能性が考えられる。出土遺物としては、坏身2点、坏蓋2点と高坏、甕の破片を確認した。



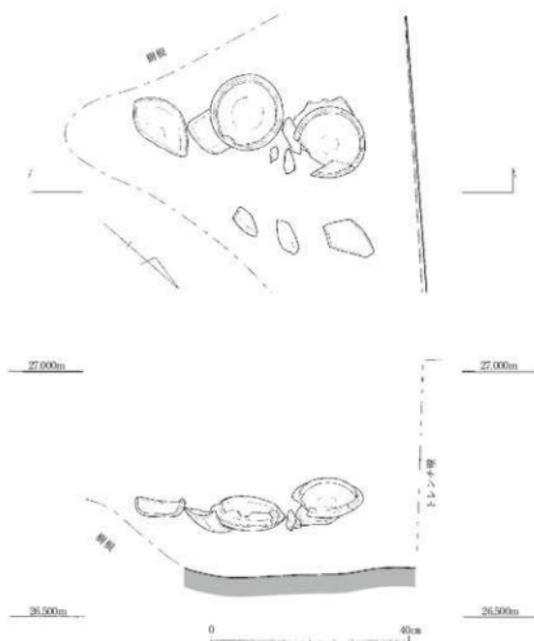
第5図 16号墳調査区平面図 (Scale : 1/150)



I : 表土 土に赤い黄褐色土 (10YR4/3) 頗る多く含む。しまりなし。粘性なし。
 I' : 表土 I と同質であるが、しまりややあり。粘性なし。
 IIa : 堆積土 黒褐色土 (10YR3/1) 黒色土を主体とする。しまりなし。粘性なし。
 IIb : 堆積土 黒色土 (10YR2/1) 黒色土を主体とした土にアカホヤブロックを少量含有する。しまりあり。粘性あり。
 IIc : IIb と同質であるが、アカホヤブロックを顕に含有する。しまりなし。粘性や
 III : 堆積土 黒褐色土 (10YR3/1) 礫土分がわずかに混入する。しまりなし。粘性や
 IIIa : 自然堆積土 (原ボク) 暗褐色土 (10YR3/3) ThS を多量に含有する。しまり
 ややあり。粘性ややあり。
 IIIb : 自然堆積土 (原ボク) 暗褐色土 (10YR3/3) IIIa とほぼ同質。ThS が IIIa より
 もやや少ない。しまりややあり。粘性ややあり。
 IIIc : 自然堆積土 (原ボク) 黒褐色土 (10YR3/1) 明度は明るく茶色が強い。しま
 りあり。粘性ややあり。

Na : 堆山 (原ボク) 暗褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性ややあり。
 Nb : 堆山 (アカホヤ) 暗褐色土 (10YR4/4) アカホヤブロックと黒色土が混在する。
 しまりあり。粘性ややあり。
 Nc : 堆山 (アカホヤ) 暗褐色土 (10YR4/4) しまりあり。粘性ややあり。
 Nd : 堆山 (アカホヤ) 暗褐色土 (10YR4/4) しまりなし。粘性なし。
 Ne : 堆山 (ローズ) 暗褐色土 土に赤い黄褐色土 (10YR4/3) しまりあり。粘性ややあり。
 KRI : 肥土 暗褐色土 (10YR4/4) ローズ土が主体。しまりあり。粘性ややあり。
 KR2 : 肥土 暗褐色土 (10YR4/4) 耕作による肥土。しまりなし。粘性なし。

第6図 16号墳土層断面図 (Scale : 1/100)



第7図 16号墳墳頂部遺物出土状況 (Scale : 1/10)

クが密集する箇所があり、盛土単位の可能性も考えられる。出土遺物としては、須恵器の坏身片、弥生土器片等を確認した。

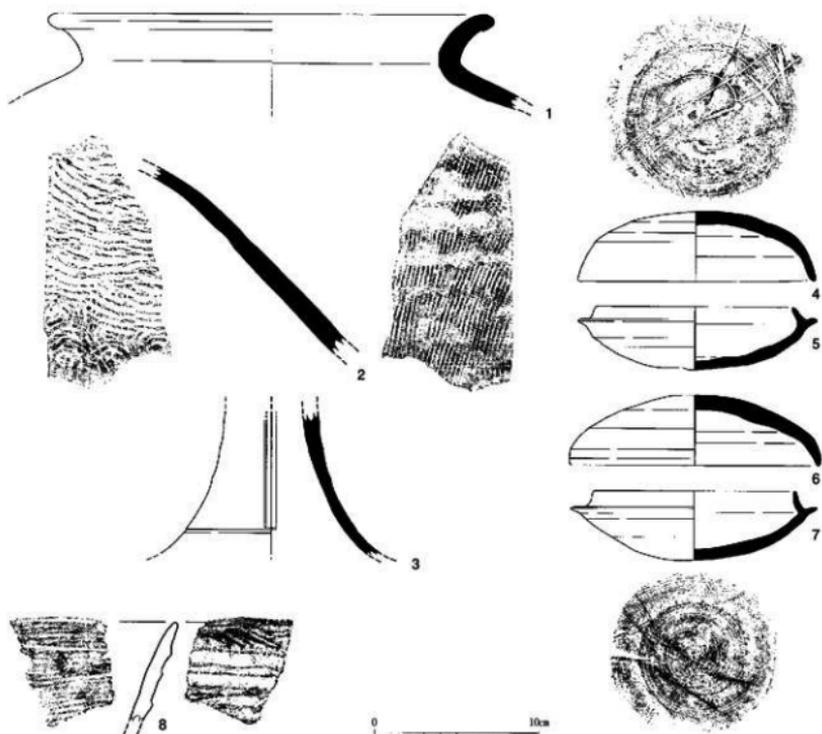
16D 16号墳は18号墳と隣接することから両者の関係性について確認するため、18Bと連結させた形で設定をおこなった。墳丘斜面から削平をうけており、墳丘外側では周溝等古墳関連の遺構を検出することができなかった。そのため18号墳と16号墳築造の前後関係については不明である。地表面から35～55cm下で墳丘面を確認した。墳丘斜面の一部にTh-Sを含有した黒ボク土が堆積しており、この部分は古墳本来の形状をとどめていると考えられる。出土遺物としては、須恵器の坏蓋、高坏、甕、弥生土器や縄文土器片等が出土した。

出土遺物 1は16D墳頂部の表土、2～7は16A墳頂部の墳丘面(第7図)、8は16Bの客土中出土である。墳頂部出土の須恵器坏(4～7)はTK43型式のものである。8は縄文土器口縁部片で、縄文時代前期前半の轟B式に分類される。

小結 古墳周囲は大きく削平されており、現況の墳丘外側で古墳にともなう遺構がまったく見られなかったため、古墳の規模については明らかにできなかった。出土遺物としては、各トレンチの墳頂部～墳丘裾部で須恵器を検出した。墳頂部で検出した須恵器のなかでもほぼ完形で出土した坏は、出土状況から蓋と身がセット関係である。主体部の平面プランを今回のトレンチでは確認することができなかったが、須恵器の出土状況から堅穴系埋葬施設の可能性が考えられる。出土した須恵器の年代か

16B 墳丘斜面の途中から削平を受けているため墳丘外側では、周溝等の古墳関連遺構は検出できなかった。地表面から35～45cm下で墳丘面を確認した。墳丘盛土は、茶褐色土を主体としており、アカホヤブロックを多く含有する。墳丘の一部にはTh-Sを含んだ黒ボク土がわずかに残存していることから、古墳本来の形状を保っている可能性が考えられる。出土遺物としては須恵器の坏身、高坏、甕の破片を確認した。

16C 墳丘斜面の途中から削平を受けているため、墳丘外側では周溝等の古墳関連遺構は検出できなかった。地表面から35～45cm下で墳丘面を確認した。墳丘盛土は茶褐色土主体の部分と黒色土主体の部分がある。表土および盛土の一部にアカホヤブロック



第8図 16号墳出土遺物 (Scale: 1/3)

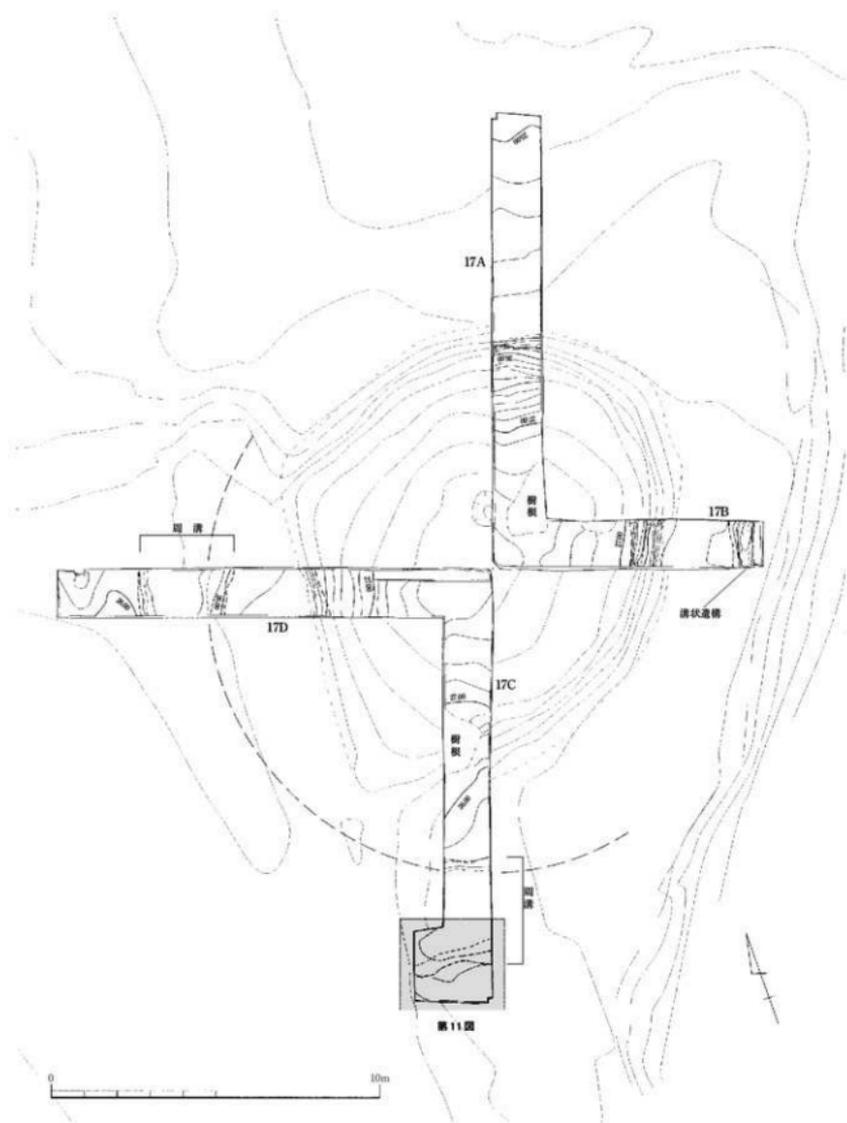
ら、16号墳はTK43並行期に位置付けられる。

(2) 17号墳

17号墳は、現況で最大径15m、高さ2.0mの円墳である。台地の縁辺に位置し、古墳の東側は崖に面している。

調査の結果、地表面から20～50cm下で墳丘面を検出した。盛土は、墳頂部から斜面では茶褐色土にアカホヤ粒子～ブロックやロームブロックを含有する土、斜面では黒色土にアカホヤブロックを含有する土が認められた。含有する地山土はアカホヤが主体となっており、古墳築造の際に周囲を削り出した土を利用しているものと考えられる。墳頂部において埋葬施設の痕跡を確認することができなかったが、南側周溝外側の立ち上がりで地下式横穴墓と思しき遺構を検出した。

17A 墳丘斜面の途中から削平を受けているため、周溝等古墳に伴う遺構は確認できず耕作による攪乱土を5～10cm程除去すると、すぐに地山(ローム)となる。周溝が確認されているトレンチと比べて、現況の地形が低くなっていることから周溝は完全に削平されているものと思われる。墳丘面は地表面



第9図 17号墳調査区平面図 (Scale : 1/150)

東側は迫になっていることから、古墳の東側には元来周溝が廻っていない可能性もある。

墳丘面は地表面から25～35cm下で検出した。墳丘盛土は、茶褐色土を主体とするもので、アカホヤ粒子を多く含む。また、古墳にともなうものではないがトレンチ東端で溝状遺構を検出した。出土遺物はなく、時期等は不明である。

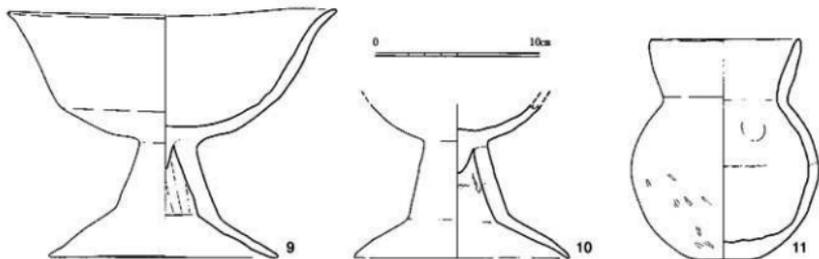
17C 地表から20～40cm下で墳丘面となる。墳丘面では、墳頂部から斜面で茶褐色土、斜面で黒色土主体の盛土を検出した。他のトレンチと同様に墳丘斜面の途中から削平を受けていたが、墳丘外側において地表から約15cm下のアカホヤ面で周溝覆土を確認したため、周溝の一部が残存することがわかった。周溝残存部の幅は4.0m、深さ25～30cmである。墳端は、現況の墳端から南へ2.9mの位置にあり、その間は完全に削平されている。墳丘裾部の標高は25.7mである。

また、周溝外側の立ち上がり付近で地下式横穴墓の可能性が高い遺構と、これにともなう土師器を検出した(第11図)。土師器類は、周溝外側の覆土を除去する際に自然堆積の黒ボク土下層で確認した。種類としては高坏・広口壺・二重口緑壺があり、それぞれの個体の周囲に同一破片が広がっていることから、原位置に近いものと考えられる。土器直下には、地山土(ローム)を主体とした置土があり、それを除去すると溝状の灰色土と黒色土の広がりを検出した。その形状から堅坑とそれにとまなう溝状遺構(堅坑掘削にとまなう地業か)と思われる。堅坑はトレンチの西側へ続く状況であり、遺構の全体は確認できなかったため、規模等は不明である。また、周溝外側で古墳築造以前の溝状遺構を検出した。地下式横穴墓にとまなう出土遺物以外に遺物は認められなかった。

17D 地表から35～40cm下で墳丘面となる。墳丘面では、墳頂部から斜面で茶褐色土、斜面で黒色土主体の盛土を検出した。他のトレンチと同様に墳丘斜面の途中から削平を受けていたが、墳丘外側において地表から約40cm下のアカホヤ面で周溝覆土を確認したため、周溝の一部が残存することがわかった。周溝残存部の幅は2.9m、深さ40cmである。墳端は、現況の墳端から西へ2.5mの位置であり、その間は完全に削平されている。墳丘裾部の標高は25.8mである。

古墳にともなう遺物は確認できなかったが、周溝外側で弥生土器の高坏・二重口緑壺の破片が出土した。

出土遺物 9～11は17Cで検出した地下式横穴墓の可能性のある遺構にともなって出土した土師器類である(第11図)。同地点より二重口緑壺も出土しているが、現在整理中のため、次年度以降の報告書中に掲載する。高坏、二重口緑壺ともに古墳時代中期中葉に比定される。



第12図 17号墳出土遺物 (Scale: 1/3)

小結 墳丘外側では、2ヶ所のトレンチで周溝を確認し、検出した墳端から規模を復元すると直径17mの円墳となることがわかった。17Cトレンチ周溝外側斜面では、地下式横穴墓の可能性が高い遺構とそれにとまなう土器を検出した。墳丘および墳丘外側で遺物が検出できなかったものの、17Cで出土した地下式横穴墓にとまなう土師器の時期が中期中葉のため、17号墳の築造時期はそれ以前に位置付けられるものと考えられる。

(3) 18号墳

18号墳は現況で最大径17m、高さ2.5mの円墳である。台地の縁辺に位置しており、古墳北側はすぐ崖になっている。古墳周囲は段状に造成されており、16号墳と同様に周辺よりも一段高いところに古墳が立地する。調査の結果、地表面から20～50cm下で墳丘面を検出した。盛土は黒色土、茶褐色土を主体とし、アカホヤ粒子～ブロックを含有する。盛土に含まれる地山土はアカホヤが主体となっており、古墳築造の際に周囲を削り出した土を利用しているものと考えられる。墳頂部において、埋葬施設の痕跡を確認することはできなかった。

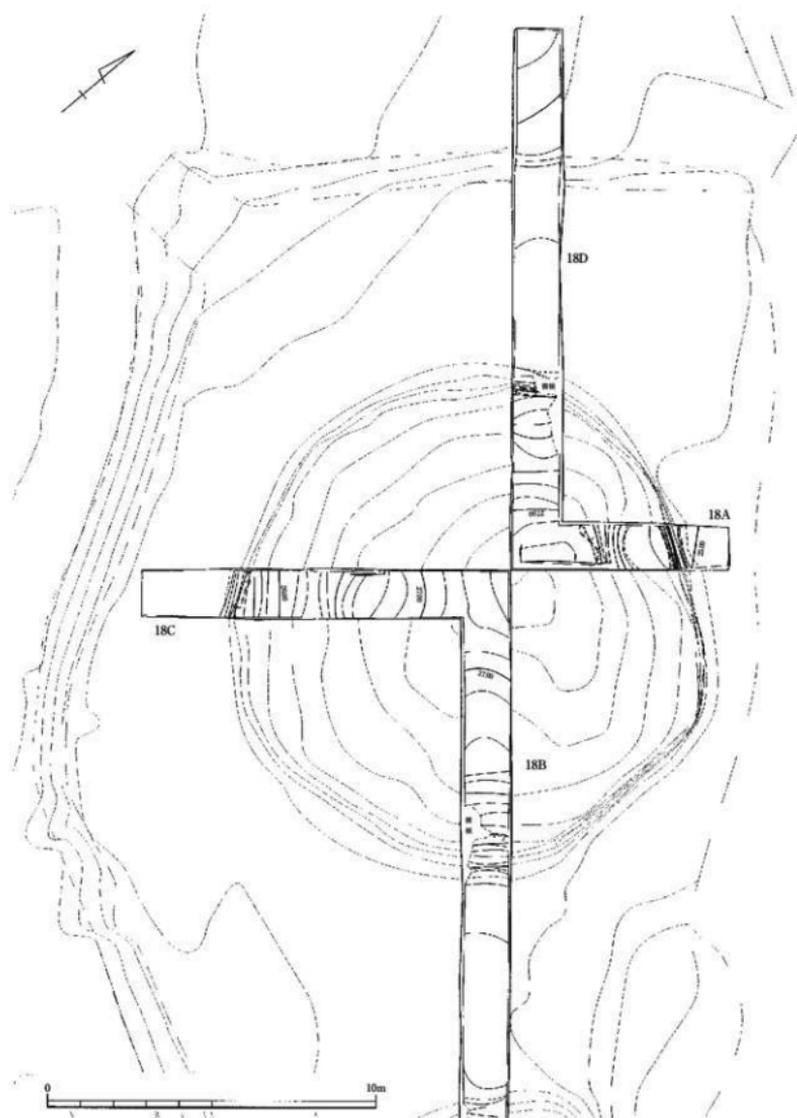
18A 崖に近接し、墳丘途中から削平されていることから墳丘外側において周溝等古墳関連の遺構を検出することができない。台地の縁辺側であることから、周溝は当初からなかった可能性が考えられる。墳丘面の直上には客土が堆積していることから、残存する墳丘斜面についても後世の改変を受けていると考えられる。地表面から20～40cm下で墳丘面となる。墳丘盛土は、茶褐色土を主体とした土にアカホヤブロックを非常に多く含有し、しまりが弱い。出土遺物は認められなかった。

18B 隣接する16号墳との関係を確認するために16Dと連結した形でトレンチを設定した。墳丘外側は耕作など後世の造作によって削平されており、古墳築造の前後関係などは不明である。墳丘面については、地表面から30～50cm下で確認した。一部において、Th-Sを含有した黒ボク土が残存していることから、この部分は古墳本来の形状を保っている可能性が考えられる。墳丘盛土は、黒色土を主体とした土にアカホヤブロックをわずかに含有する。出土遺物は縄文土器片のみで古墳にとまなう遺物は認められなかった。

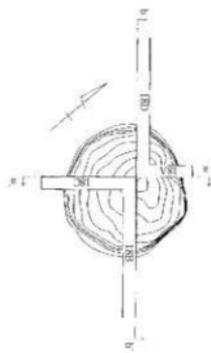
18C 地表面から20～40cm下で墳丘面となる。盛土は黒色土・茶褐色土を主体とする土にアカホヤブロックをわずかに含有する。トレンチ南側は階段状に一段低く、後世の造成による平坦面が広がっており、表土から15cm下で地山（ローム）となるため周溝等古墳関連の遺構は確認できない。墳丘裾部分は、客土が堆積していることから墳丘斜面の途中から大きな改変を受けているとみられる。出土遺物は、縄文土器片のみで古墳にとまなう遺物は認められなかった。

18D 地表面から20～45cm下で墳丘面となる。盛土は18Aと同様に茶褐色土や黒色土を主体とする土に、アカホヤブロックを非常に多く含有するもので、しまりが弱い。周辺より一段高い平坦面上に立地していることから、平坦面およびその下で古墳にとまなう遺構の有無を確かめるため、平坦面から下段までのトレンチを設定した。古墳外側においては、客土や攪乱土を15～30cm程除去すると地山（ローム）となり、完全に削平されているため周溝等古墳関連の遺構は確認できない。出土遺物として須恵器の坏、甕の破片が認められたが、表土や攪乱土より出土していることから古墳にとまなうものかどうかは不明である。その他に縄文土器片が出土した。

小結 古墳周囲は大きく削平されており、現況の墳丘外側に古墳にとまなう遺構がまったく見られないため、古墳の規模については明らかにできない。また、古墳にとまなう遺物が認められないため古墳の築造年代についても不明である。



第13图 18号墳調査区平面図 (Scale : 1/150)



I : 表土 に赤い黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。粘性なし。根を多く含む。

II : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。粘性なし。アサキヤ種子-アロワカを含有。

III : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。粘性なし。しまりややあり。

IV : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。粘性あり。

V : 表土 灰黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。粘性あり。

VI : 表土 灰黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。粘性ややあり。

VII : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) 堆山 (ローA) 崩落土にシラスアロワカをわずかに含有。しまりあり。

VIII : 表土 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり強い。粘性ややあり。シラス土を主体とする。

IX : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) アサキヤ種子-アロワカを含有。しまりなし。粘性なし。

X : 表土 黒褐色土 (10YR3/2) アサキヤ種子-アロワカを含有。しまりややあり。粘性ややあり。

III : 自然崩壊土 (黒ガク) 黒色土 (10Y2/1) しまりあり。粘性あり。T.S.Sを少量含有す。

IVa : 産土崩落土 黒褐色土 (10YR3/4) しまり強い。粘性ややあり。

IVb : 産土崩落土 黒褐色土 (10YR3/4) しまり強い。粘性ややあり。

IVc : 堆山 (黒ガク) 崩落土 黒色土 (10YR2/1) しまりなし。粘性あり。

IVd : 堆山 (アサキヤ) 崩落土 黒褐色土 (10YR4/4) しまりなし。粘性なし。

IVe : 堆山 (ローA) 崩落土 黒褐色土 (10YR3/1) しまりなし。粘性ややあり。

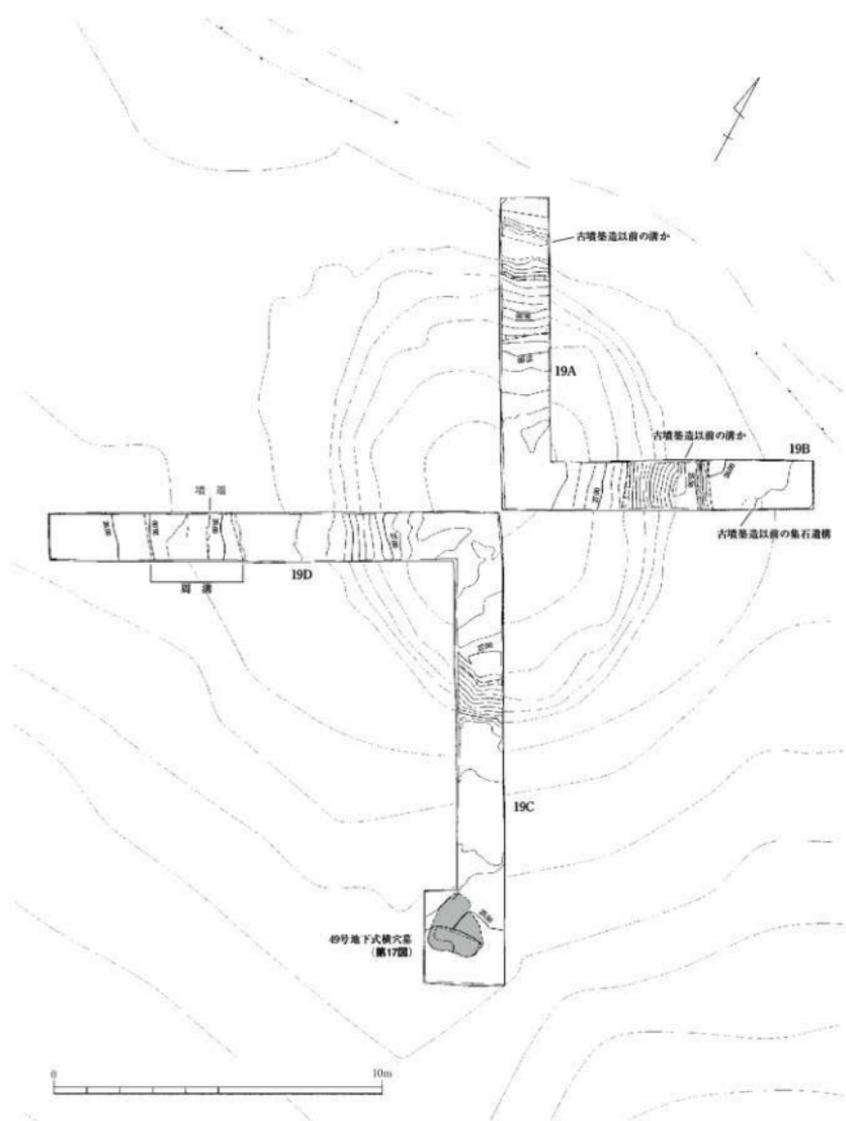
IVf : 堆山 褐色土 (10YR4/4) 耕作による崩壊。ローAが主体の土。しまりあり。粘性ややあり。

KR2 : 産土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりややあり。粘性ややあり。

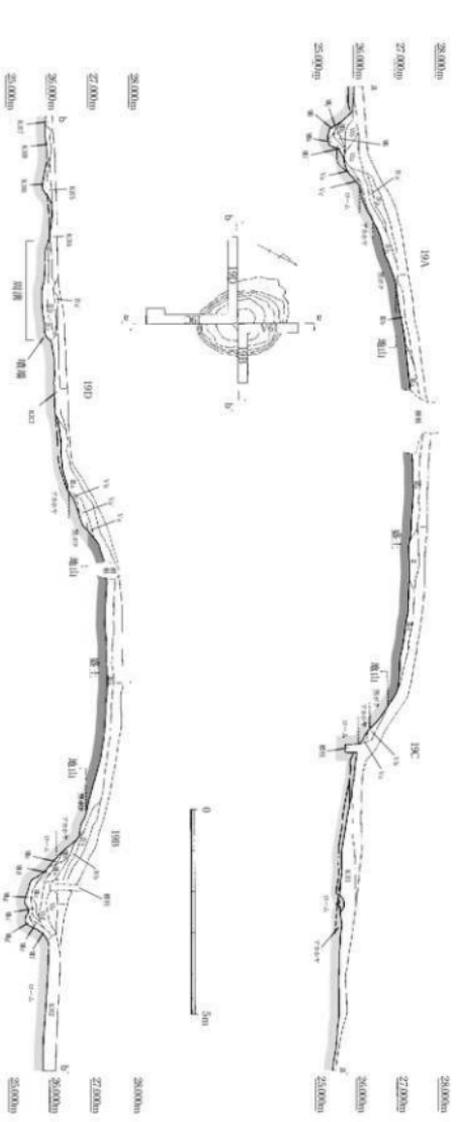
KR2 : KR2と同質。ローA質が強い。

KR3 : 産土 褐色土 (10YR5/3) ローA主体の土にアサキヤ・黒土が混入。しまりあり。粘性あり。

第14図 18号墳土層断面図 (Scale : 1/140)



第15図 19号墳調査区平面図 (Scale : 1/150)



I : 赤土 黒褐色土 (10YR3/3) しまりぬい・粘性なし・粘粒を多く含む。上部には黄褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を含有することから、断面は黒土 (10YR2/1) 及以上はほぼ同等。部分にはフカヤフカヤを含有することから、断面下部は砂入り赤土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性なし。
 IIa : 赤褐色土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性なし。
 IIb : 赤褐色土 黒褐色土 (10YR3/2) TH.Sを多く含む。断面は黄褐色土を付けており、自然腐植 (腐葉層) 黒褐色土 (10YR1/1) しまりぬい・粘性あり。TH.Sを断面に含有する。
 III : 自然腐植 (腐葉層) 黒褐色土 (10YR3/2) フカヤフカヤを含有し、まりぬい・粘性なし。VA : 黒土 黒褐色土 (10YR3/2) 黒土を主体とする土にフカヤフカヤを少量含有する。しまりぬい・粘性あり。
 VB : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) 黒土を主体として、フカヤフカヤを含有する。ローム状土を含有する。しまりぬい・粘性あり。
 VC : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性あり。下部部分はフカヤフカヤを含有する。黒褐色土 (10YR4/4) 黒褐色土 (10YR3/2) 断面はどろり感がある。
 VD : 赤土 黒褐色土 (10YR2/1) 褐色砂子を多く含む。しまりぬい・粘性あり。
 VE : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) 須臾砂・土塊砂片を多く含む。しまりぬい・粘性あり。
 VF : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性あり。断面は砂質で、明瞭な塊い・土を顕微鏡する。
 VG : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性あり。断面は砂質で、明瞭な塊い・土を顕微鏡する。
 VH : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) フカヤフカヤを多く含む。しまりぬい・粘性あり。
 VI : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) ローム (灰色) 土を主体として、フカヤフカヤを含有し、まりぬい・粘性あり。
 VII : 赤土 黒褐色土 (10YR3/2) 断面は、わすかにフカヤフカヤを含有し、まりぬい・粘性あり。

VIII : 黒褐色土 黒褐色土 (10YR3/3) フカヤフカヤを含有する。しまりぬい・粘性あり。
 IX : 黒褐色土 黒褐色土 (10YR4/4) 断面は黒褐色土 (10YR3/3) 上層との黒褐色土 (黒の土混ざる) ローム状土をわすかに含有する。しまりぬい・粘性あり。
 X : 赤褐色土 褐色土 (10YR4/4) 腐葉層。フカヤフカヤ・ローム状土をわすかに含有する。しまりぬい・粘性あり。
 XI : 赤褐色土 褐色土 (10YR4/4) 断面は砂質で、明瞭な塊い・土を顕微鏡する。
 XII : 赤褐色土 褐色土 (10YR4/4) しまりぬい・粘性あり。
 XIII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/2) しまりぬい・粘性あり。
 XIV : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/2) わすかにフカヤフカヤを含有する。しまりぬい・粘性あり。
 XV : 赤褐色土 褐色土 (10YR2/1) 黒褐色土を主体として、フカヤフカヤを含有する。しまりぬい・粘性あり。
 XVI : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/2) 黒褐色土を主体として、フカヤフカヤを含有する。しまりぬい・粘性あり。
 XVII : 赤褐色土 褐色土 (10YR4/4) ローム状土を多く含む。しまりぬい・粘性あり。
 XVIII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/2) 断面は砂質で、明瞭な塊い・土を顕微鏡する。しまりぬい・粘性あり。
 XIX : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) ローム状土を含有する。わすかに黒褐色土、フカヤフカヤを含有し、まりぬい・粘性あり。
 XX : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXI : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXIII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXIV : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXV : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXVI : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXVII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXVIII : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXIX : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。
 XXX : 赤褐色土 褐色土 (10YR3/3) 黒褐色土を主体とする。しまりぬい・粘性あり。

第16図 19号土層断面図 (Scale : 1/120)

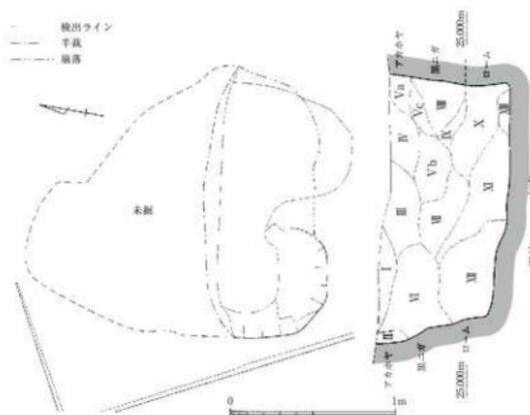
(4) 19号墳

19号墳は現況で最大径15m、高さ1.6mの円墳である。台地の縁辺に位置しており古墳北側は崖になっている。調査の結果、表土から30～60cm下で墳丘面を確認した。墳丘盛土は、黒色土にアカホヤブロック、ロームブロックを含有する。盛土に含まれる地山土はアカホヤが主体となっており、古墳築造の際に周辺を削り出した土を利用して利用しているものと考えられる。墳頂部において埋葬施設の痕跡を確認することはできなかった。

19A 墳丘外側で周溝等古墳関連の遺構は確認できず、地表面から約20cm下で地山（ローム）となる。台地の縁辺に面しており、墳丘外側が崖に近接することから、当初から周溝はなかった可能性がある。地表面から30～60cm下で墳丘面となる。墳丘盛土は、黒色土にアカホヤブロックを含有するものである。墳丘の一部に、Th-Sを含有する黒色土が残存していることから、この部分は古墳本来の形状が残存する可能性があると考えられる。

また、墳丘裾部で幅約40cmの溝状遺構を検出した。土の堆積状況や傾斜角度また、溝の断面形状からみて、古墳にともなうものとは考えられない。溝覆土は、黒色土および黒褐色土を主体としており、アカホヤやロームの粒子～ブロックを含む。覆土の状況から自然堆積と考えられる。溝覆土の上部は、Th-Sを含有する黒ボク土が途中でとぎれており、古墳築造以後に削平を受けている。溝内出土遺物として、縄文土器片を確認した。19Aでの出土遺物として、須恵器・土師器の破片を確認したがすべて客土中（VIb層）に含まれるものであるため古墳にともなっていたものかどうかは判断できない。含まれていた土器のほとんどは須恵器で、種類としては坏身、坏蓋、高坏、甕などを確認した。小片の状態であったが、完形に近いほどに接合可能なものもあった。

19B 墳丘外側では周溝等古墳関連の遺構は確認できない。墳丘部分については地表面から35～45cm下で墳丘面となり、墳丘盛土は黒色土にアカホヤブロックを含有する。墳丘の一部にTh-Sを含有する黒色土が残存していることから、この部分は古墳本来の形状が残存すると思われる。



第17図 49号地下式横穴墓平面および土層断面図 (Scale: 1/30)

- I 黄土、灰褐色土 (25YR6/2) 層の砂土を多量に含有、数mm～数cmのアカホヤ・ロームブロック、砂をばらばらに含有、黒褐色土と白褐色土の混交層に、5cmの層厚時に区別される。
- II 黄褐色の腐植層部分、灰褐色土 (25YR7/4) アカホヤ粒子をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- III 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- IV 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- V 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- VI 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- VIa 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- VIb 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- VII 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- VIII 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- IX 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。
- X 黄土の腐植層部分、灰褐色土 (25YR6/2) 灰褐色土をばらばらに混交した砂土の粒子が混在する。

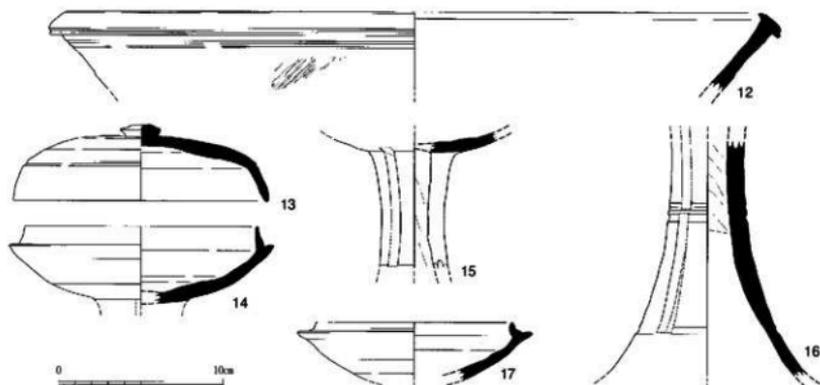
また、墳裾付近で幅1.1mの溝状遺構を検出した。土の堆積状況や溝の傾斜角度、また溝の断面形状からみて、古墳にともなうものとは考えられない。また、堆積する土質は似ているものの、溝の断面形状や幅が19Aの溝と異なることから、一連のものではない可能性が高い。溝覆土の上部は、Th-Sを含有する黒ボク土が途中でとぎれており、古墳築造以後に削平を受けている。

溝状遺構外側で集石遺構を検出したが、掘削はせず現況でとどめている。集石遺構は、出土した縄文土器から縄文時代早期に位置付けられる。トレンチ内の出土遺物は縄文土器のみで、古墳にともなう遺物は認められない。

19C 地表面から30～40cm下で墳丘面となる。墳丘盛土は、黒色土を主体としてアカホヤブロックを含有する。墳丘外側はローム層まで攪乱を受けているため、墳丘外側はロームとなるが、アカホヤが残存する部分もある。出土遺物は、縄文土器、弥生土器の破片のみで、古墳にともなう遺物は確認できなかった。トレンチの南端はアカホヤがわずかに残存しており、その面において地下式横穴墓を1基検出した。

49号地下式横穴墓（第17図） 墳丘外側のアカホヤ面で黒色土の広がりを検出した。古墳周辺では、弥生時代の土坑や土壌墓などが検出されており、古墳にともなうものかどうかを確認するため半蔵作業をおこなった。その結果、掘削後の平面プランや土の堆積状況などから平入り型の地下式横穴墓であることが判明した。竪坑は横方向に長い長方形の平面プランで、上端0.79×1.8m、深さ75cmである。玄室北側は遺構検出面が乱れておらず、アカホヤ面となっていることから上部が崩落していない可能性がある。出土遺物は認められなかった。

19D 地表面から40～50cm下で墳丘面が確認できる。墳丘盛土は、黒色土を主体としてアカホヤブロックを含有する。墳丘斜面の途中から削平を受けていたが、墳丘外側において、地表から約30cm下のアカホヤ面で周溝覆土を確認したため、周溝の一部が残存することがわかった。周溝残存部の幅は2.6m、深さ40cmである。墳端は、現況の墳端から南へ3.1mの位置であり、その間は完全に削平されている。墳丘裾部の標高は25.9mである。出土遺物は、縄文土器のみで古墳にともなう遺物は確認できなかった。



第18図 19号墳出土遺物 (Scale: 1/3)

出土遺物 12～16は19A客土中出土の須恵器類である。12は器台口縁部かとも思われるが、大型の甕となる可能性が高い。13～16は高坏の各部であり、坏部の残る14・15は接合しない別個体である。高坏14、坏身17ともにTK43型式に分類される。

小結 19D以外で肩溝等古墳関連の遺構を検出することができなかったため、古墳の規模については明らかにできない。また、古墳にともなう遺物についても確認できなかったことから、古墳の築造年代も不明である。しかし、19Aの客土中より出土した須恵器がTK43並行期のものであり、墳頂部に配置されていたものであるとすれば、16号墳に近い時期に築造されたものと推測される。

表2 出土遺物観察表

掲載番号	巻号	出土箇所	種別	器種	法量cm ()	口径		色		調整		備考	注記記号	実測番号			
						口径	底径	器高	外面	内面	外面				内面		
p.11 第8回	1	16号墳 Tr.16D 墳頂部 表土	須恵器	甕I	(25.8)	—	—	灰黄	灰黄	2.5Y7/2	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	一部自然釉	IMK16D-a 表土	5	
	2	16号墳 Tr.16A・B 墳頂部 墳丘面	須恵器	甕I	—	—	—	灰黄	灰黄	7.5Y4/1	2.5Y6/2	格子目タタキ	田岡カキ	肩部近く	IMK16A・B 墳丘面	7	
	3	16号墳 Tr.16A 墳頂部 墳丘面	須恵器	高坏	—	—	—	暗灰黄	暗灰青	2.5Y5/2	2.5Y5/2	回転ナデ	回転ナデ	脚部下平 長方形スカシ4方向	IMK16A 8	6	
	4	16号墳 Tr.16A・B 墳頂部 墳丘面	須恵器	高坏	14.3	—	4.4	暗灰黄	暗灰青	2.5Y5/2	2.5Y5/2	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	完形 外面串状工具による沈溝2条	IMK16A 3・4, IMK16A 墳丘面	4	
	5	16号墳 Tr.16A・B 墳頂部 墳丘面	須恵器	坏身	12.5	—	3.9	灰	暗灰黄	5Y5/1	2.5Y5/2	回転ナデ	回転ナデ	完形	IMK16A 1	1	
	6	16号墳 Tr.16A・B 墳頂部 墳丘面	須恵器	坏身	15.1	—	4.3	灰	灰オリブ	5Y5/1	5Y5/2	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	ほぼ完形 外面刀子状工具による沈溝2条	IMK16A 4・5・6・7	3	
	7	16号墳 Tr.16A・B 墳頂部 墳丘面	須恵器	坏身	12.3	—	4.3	灰	灰	5Y5/1	5Y5/1	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	完形 外面刀子状工具による×字沈溝	IMK16A 2・5, IMK16B 墳丘面	2	
	8	16号墳 Tr.16B 客土	縄文土器	甕	—	—	—	暗灰黄	黄褐色	2.5Y5/2	2.5Y5/4	余灰文	余灰文	竊孔式 つまみ上げによる微隆	IMK16B 墳丘面	8	
p.15 第12回	9	17号墳 Tr.17C 周溝外側立ち上り部	土師器	高坏	20.1	14.0	14.0	15.2	橙	橙	5YR7/8	5YR7/8	摩滅 ミガ	摩滅 脚部	今塚原期(段階か「宮崎地区七「板平遺跡」2011)	IMK17C 32 他	11
	10	17号墳 Tr.17C 周溝外側立ち上り部	土師器	高坏	—	(13.1)	—	—	橙	橙	2.5Y6/8	2.5Y6/8	摩滅	摩滅	I 脚部欠損	IMK17C 18	12
	11	17号墳 Tr.17C 周溝外側立ち上り部	土師器	広口甕	9.1	3.8	13.4	—	橙	橙	5YR6/6	5YR6/6	横ナデのちび	横ナデ・横ナデ	脚部残存率1/2段, I 脚部全欠	IMK17C 1 他	10
p.22 第18回	12	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	甕I	(42.2)	—	—	—	灰	灰オリブ	7.5Y4/1	5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	外面溝方向沈溝および斜め方向のヘラ掘3沈溝文	IMK19A 客土	14
	13	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	高坏	15.4	—	4.6	灰	灰	7.5Y5/1	7.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ完形	IMK19A 客土	16	
	14	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	高坏	14.0	—	—	灰	灰	10Y5/1	10Y5/1	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	坏底部、わずかに長方形スカシ3方向	14 別個体	IMK19A 客土	17
	15	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	高坏	—	—	—	オリブ	灰	10Y3/2	7.5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	長方形スカシ3方向	14 別個体	IMK19A 客土	20
	16	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	高坏	—	—	—	灰	灰	N4	N5	回転ナデ	回転ナデ	長方形スカシ3方向2段	IMK19A 客土	19	
17	19号墳 Tr.19A 客土	須恵器	坏身	(12.0)	—	—	—	灰白	灰黄	2.5Y7/1	2.5Y6/1	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	TK43	IMK19A 客土	18	

第三章 総括

第1節 出土遺物の性格と時間的位置付けについて

今回の調査では16号墳、17号墳において良好な状態での遺物の出土が見られた。16号墳では墳頂部において須恵器坏身・蓋4点がまとまって出土し、17号墳では周溝外側立ち上りの斜面から外側の平坦面にかけての箇所において土師器壺、高坏等が1.5m程の範囲において出土した。接合状況からも、ほぼ原位置を保っていると思われる。

16号墳出土の須恵器は、16号墳そのものに伴うものと判断される。出土レベルは墳丘面の直上であり、配置としてもほぼ原位置を保っていると思われる良好な資料である。

墳頂における堅穴系主体部の明確な検出はされなかったものの、位置としては古墳主体部の直上に配置されたものと思われる。ただし、当地域においては5世紀後半以降、地下式横穴墓を主体部とする円墳も複数例確認されており、今回のトレンチ調査では検出されていないものの、16号墳もまた地下式横穴墓を主体部とする古墳である可能性も十分に考えられよう。

地下式横穴墓の上および周辺における土器による墓前祭祀は、生目古墳群における現在までの調査では、その初現である5世紀初頭から見られるものである。16号墳の埋葬施設が堅穴系埋葬施設にしろ地下式横穴墓にしろ、墳頂出土の須恵器群もまた、埋葬終了後の祭祀に用いられたものと思われる。出土した須恵器はTK43型式のものであり、この須恵器の年代観がそのまま16号墳の時間的位置を示すものと判断してよい。したがって16号墳は前方後円墳集成編年の10期に位置付けられる。

17号墳出土の土師器群については、残念ながら17号墳そのものに伴うものではなく、17号墳に従属する形で構築された地下式横穴墓に伴うものである可能性が高い。

当該遺物群は地山であるローム土が攪拌されたような状態の土中より出土し、この土を除去すると、土坑状の遺構が検出された。前章に述べたとおり、この遺構は地下式横穴墓の可能性が高い。地山が攪拌されたような状態の土は、地下式横穴墓の堅坑埋土および地下式横穴墓の上に広げられた置土と判断され、出土土師器群については、この地下式横穴墓の上に広がる置土上に置かれた、地下式横穴墓閉塞後の祭祀に用いられたものと思われる。

出土した土師器群は古墳時代中期中葉に比定されると思われ、これがそのままこの地下式横穴墓の時期を示すものと考えられる。これらは17号墳の時期を直接的に示すものではないが、これに伴ってつくられた地下式横穴墓は、当然ながら古墳の築造と同時ないしこれに後出するものである。また地下式横穴墓に伴う土と古墳周溝面との間に大きな時間差の存在することを示す自然堆積土も存在していない。以上より17号墳の築造時期は、中期中葉の地下式横穴墓とほぼ同時ないしこれに若干先行する位のもので推測される。

また16・17号墳のような出土状態ではないものの、19号墳からも良好なセット関係の須恵器が出土している。墳丘裾部の客土中から出土したものはあるが、各個体の接合状況も良好で、16号墳のように墳頂部に置かれていたものが転落したものかとも思われる。16号墳に近接するTK43並行期のものであり、これが19号墳の築造時期を示すものである可能性は十分に考えられる。

第2節 被葬者像について

前節に述べた16・17・19号墳は、生目古墳群のこれまでの調査において、円墳すなわち前方後円墳以外の古墳で時期が判明した初めての例となる。

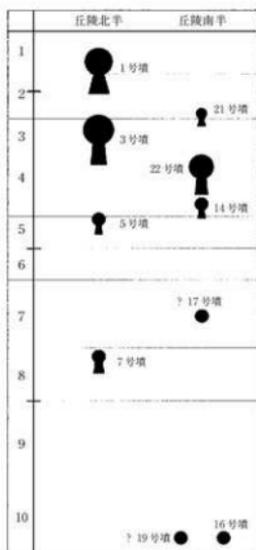
これまでの生目古墳群の首長墓系譜の検討は、当然ながら古墳群に存在する8基の前方後円墳のみで行われてきた。その概略としては、集成編年1ないし2期より築造が開始され、100m級前方後円墳が4期まで続く。その後、規模を縮小しつつ5期まで築造が続くが、6・7期は前方後円墳不在の時期となる。この断絶期を挟んで8期に再び50m前後の前方後円墳が1基だけ築造され、それをもって生目古墳群の首長墓系譜は終了を迎えるというものである。

この生目古墳群における前方後円墳の流れの中に、16号墳、17号墳、19号墳を当てはめてみると、極めて興味深い。やや不確定ながら、17号墳の時間的位置付けとして考えられる中期中葉という時期は、5号墳と7号墳の間の、前方後円墳の空白期にあたる。すなわち17号墳は、生目古墳群における首長墓系譜上の断絶期を埋める存在となる可能性がある。

先述のとおり、生目古墳群には6・7期段階における前方後円墳の断絶期があり、この期間を首長墓系譜そのものの断絶期と見るか、近隣の古墳群への墓域の移動と見るかは見解の別れるところである。仮に17号墳をこの断絶期に位置付けられるものとするならば、生目古墳群の首長層が大きく勢力を減退させた時期の首長墓である可能性も考えられる。

集成編年10期と確定した16号墳については、最後の前方後円墳である7号墳に大きく後出するものであり、19号墳もまた同時期に位置付けられる可能性が高い。7号墳と16・19号墳の間の空白の時期に、今回調査で時期の確定まで至れなかった18号墳が位置付けられる可能性も十分にあるが、重要なことは、生目古墳群においては、前方後円墳の築造終了後も、古墳築造が盛んに続けられていたということである。

規模を大きく縮小させたその姿は、首長層ではなく家父長層という言葉をあてるべきかもしれないが、その時、その時に応じて姿を大きく変えながらも、生目古墳群の系譜は古墳時代の全時期を通じて、連続と続いていたと考えられる。



第19図 生目古墳群における
主要古墳の時間的位置付け



16号墳周辺古墳近景 (南から)



16A・B 墳頂部全景 (北西から)



16A 須恵器出土状況 (北から)



16B 墳裾部地山検出状況 (南から)

16号墳調査状況 ①



16C トレンチ全景 (南西から)



16C 墳丘部地山検出状況 (南西から)



16C・D 墳頂部完掘状況 (東から)



16D 墳丘面検出状況 (西から)



16D トレンチ全景 (北西から)

16号墳調査状況 ②



17A トレンチ全景 (北東から)



17A 墳丘面検出状況 (北から)



17B トレンチ全景 (南東から)



17B 溝状遺構検出状況 (北東から)

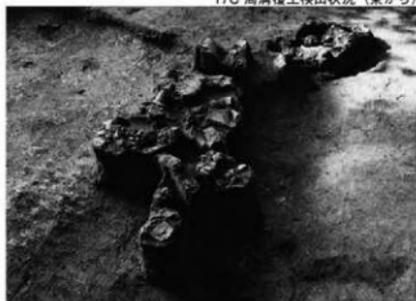
17号墳調査状況 ①



17C トレンチ全景 (南から)



17C 周溝覆土検出状況 (東から)



17C 土器器出土状況 (東から)



17D トレンチ全景 (西から)



17D 周溝断面状況 (北から)



17D 墳丘面検出状況 (北西から)

17号墳調査状況 ②



16D・18B トレンチ全景 (北西から)

左上：18A トレンチ完掘状況 (北から)

左下：18B トレンチ完掘状況 (南東から)

18号墳調査状況 ①



18C 墳丘面検出状況 (南から)



18D 墳丘面検出状況 (西から)

左上: 18C トレンチ全景 (南西から)

左下: 18D トレンチ全景 (北西から)

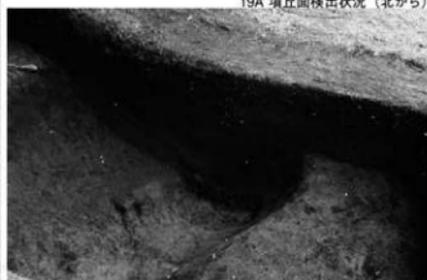
18号墳調査状況 ②



19A トレンチ全景 (北西から)



19A 墳丘面検出状況 (北から)



19A 溝状遺構完掘状況 (北東から)



19B 墳丘面検出状況 (北東から)



19B トレンチ全景 (東から)



19B 溝状遺構完掘状況 (北から)

19号墳調査状況 ①

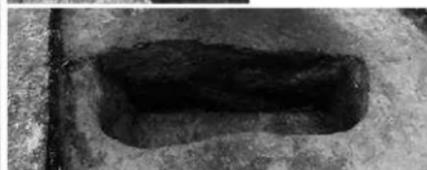
図版 8



19C トレンチ全景 (南から)



19C 墳丘面検出状況
(南から)



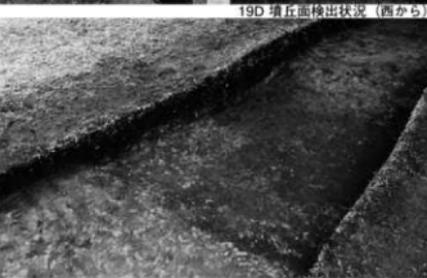
19C 49号地下式横穴墓土層断面 (南から)



19D トレンチ全景 (南西から)



19D 墳丘面検出状況 (西から)



19D 周溝完掘状況 (南西から)

19号墳調査状況 ②

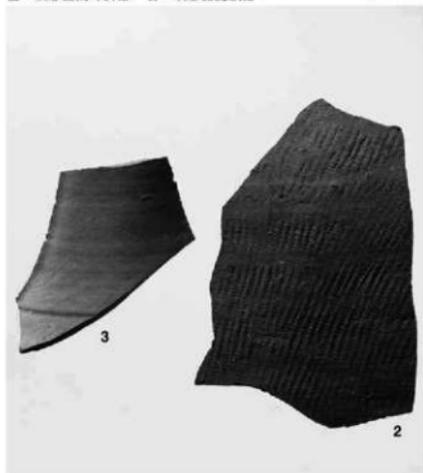


墳頂出土須惠器坏



左：須惠器高环脚部 右：須惠器變胸部

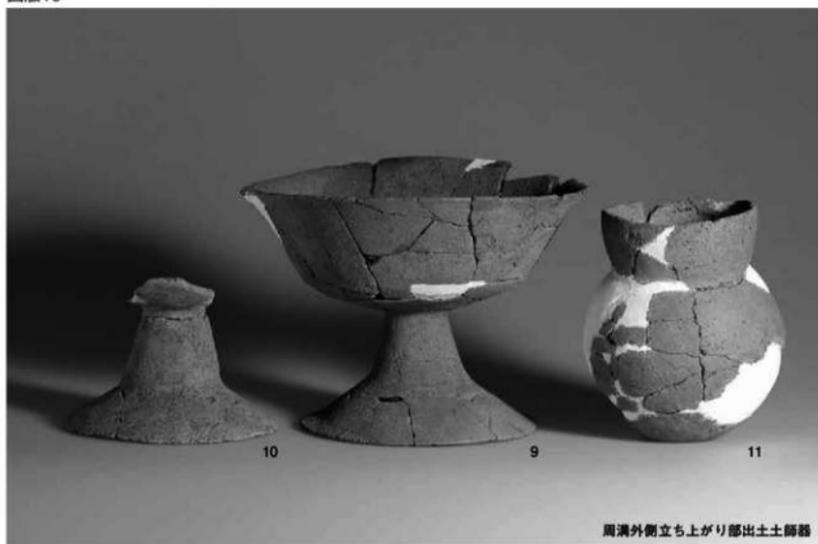
須惠器雙口緣部



窖土中出土繩文土器

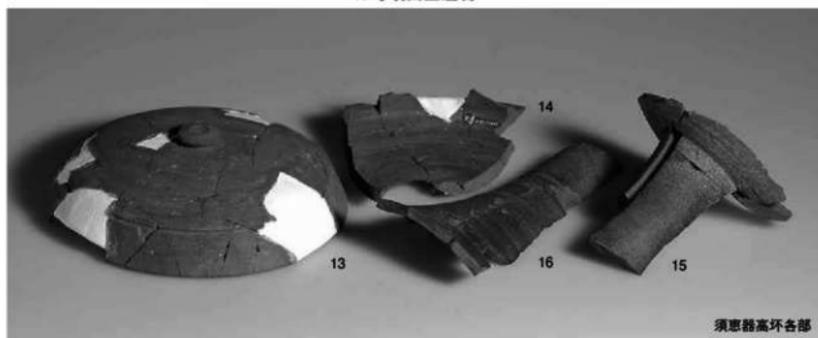


16号墳出土遺物

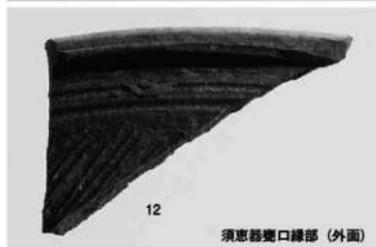


周溝外側立ち上がり部出土土器

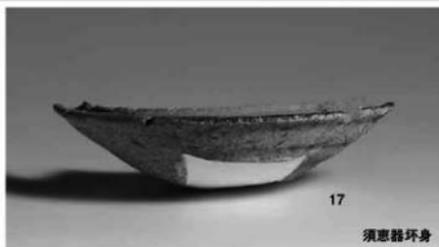
17号墳出土遺物



須恵器高環各部



須恵器甕口縁部 (外面)



須恵器环身

19号墳出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いきめこふんぐんⅢ							
書名	生日古墳群Ⅲ							
副書名	生日16・17・18・19号墳発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第96集							
編著者名	竹中克繁（編集）、瀧内美智子							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
生日古墳群 <small>いそめこふんぐん</small>	宮崎県 宮崎市 大字跡江	45201	24-059	31°56'54" 付近	131°23'15" 付近	2012. 8. 6 } 2013. 2. 28	16号墳： 38.0㎡ 17号墳： 70.4㎡ 18号墳： 66.6㎡ 19号墳： 69.1㎡ 総計：244.1㎡	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
生日16号墳 生日17号墳 生日18号墳 生日19号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘、古墳周溝、 地下式横穴墓	16号墳：須恵器（TK43） 17号墳：土師器（古墳時代 中期中葉） 19号墳：須恵器（TK43）		16号墳：墳頂部より須恵器 出土 17号墳：復元径17m 19号墳：周溝外側において 地下式横穴墓		

宮崎市文化財調査報告書 第96集

生目古墳群 Ⅲ

- 生目16・17・18・19号墳発掘調査報告書 -

2013年3月

発行 宮崎市教育委員会

